

今後とも術前診断に特殊生検，総合画像診断を採用し，積極的な手術療法を行う方針である。

14) 肛門手術におけるレーザーメスの使用経験

磯部 茂・森 隆 (社会保険浜松病院)
中村 昌樹・小山 仁 (大腸肛門科)
堀川 征機・浜辺 昇

社会保険浜松病院大腸肛門科において肛門疾患（内外痔核，痔瘻など）で手術を施行している症例は，外来手術も含め年間約1,000例に達し，満足しうる成績をあげている。しかしながら術後疼痛などを訴える症例もあり，早期退院をめざすうえ，これらの症例に対し何らかの対応が必要である。今回レーザーメスを使用する事により術直後の疼痛の緩和，出血の防止，また創の治癒状態が良好であることを知り報告する次第である。

症例は昭和61年1月より6月末までに当科に入院，手術した432例中，結紮切除術（3ないし4ヶ所）を施行した275例について，年齢別に3群にわけて比較検討した。

結果：術直後の疼痛の緩和に関しては各年齢群ともレーザーメス使用例が優れており，術後の創治癒の状態は，特に高齢者ではレーザーメス使用例の方が良好であった。さらに症例をかさねて検討する予定である。

15) 経皮内視鏡的胃瘻造設術および経胃瘻的
空腸栄養カテーテル留置の試み

佐藤 眞・相馬 剛 (新潟労災病院)
豊田 精一・塚田 昭一 (外科)

経腸栄養の投与経路として経鼻チューブ留置，外科的胃瘻術などがあるが留置の苦痛や poor risk の患者には開腹術が困難などの問題点がある。我々は開腹術を必要とせず，安全かつ短時間に施行しうる経皮内視鏡的胃瘻造設術を施行したので報告する。方法は MICRO-VASIVE 社の胃瘻カテーテルキットを用い内視鏡にて胃体前壁をセルジンガー針にて穿刺し，胃瘻作成を行った。症例は重度脳障害を有する4例であり，施行時間は約10分間で全例トラブルなく経腸栄養剤の投与ができた。この手技，有用性について報告する。

16) remnant of renal blastema

村上 博史・和田 寛治 (長岡赤十字病院)
小林 清男・神谷岳太郎 (外科)

私達は，非常に稀な後腹膜腫瘍である，remnant of renal blastema の1例を経験したので，報告する。症例は，31才男性で，6年前よりしだいに増大する右

上腹部腫瘤を主訴として来院した。検査上は，CEA 6.1と軽度上昇を示すのみで，他は消化管の検索でも異常を認めなかった。手術では，13×10×8 cm の腫瘤が右上後腹膜腔内に位置しており，摘出術を施行した。病理所見では，内容として淡黄色ゼラチン様物質を含み，被膜は大部分，粘液産生上皮からなり，一部肥厚した部分には，糸球体や尿細管様組織が認められ，remnant of renal blastema と診断された。又，酵素抗体法では，組織の一部に CEA が染色された。

remnant of renal blastema の概念は次のように考えられている。後腹膜腔の独立した腫瘍であること。充実性と嚢胞性があり，胎生期の泌尿生殖原基から発生したものであること。

17) ゴルフショット中に発生した尿管腎盂溢流の
1 治験例

興梠 建郎・小林 貞雄 (水原郷病院)
下田 聡 (外科)

外傷，手術操作，悪性腫瘍等の原因がなく，尿が尿管あるいは腎盂外に漏出することは，極めて稀な現象で日常経験することはほとんどない。

今回，45才男性で，ゴルフショット後突然の激しい腹痛を来し，ショック状態にて来院，緊急開腹手術で，左後腹膜腔に多量の尿漏出がみられたため，尿管カテーテル法，後腹膜腔ドレナージにより，救命し得た症例を報告する。術前の DIP では尿漏出は確認できず，又術中及び術後の検査でも，尿漏出部位は不明であった。術前の DIP で左腎盂の拡張，立位～臥位で腎の上下動巾が広く，腎固定異常，あるいはそれと尿管結石の存在が考えられたが，確証はない。

18) 著明な口内炎を伴ない，中部および
下部食道に web 様狭窄を呈した良性食
道狭窄の 1 例

神田 達夫・小田 幸夫 (新潟県済生会)
榎本 一彦 (三条病院外科)
福島 茂樹 (同 内科)
宮下 薫・川口 英弘 (新潟大学)
佐々木公一・小山 真 (第一外科)

良性食道狭窄は比較的稀な疾患であるが，その原因は多彩である。鉄欠乏性貧血，舌炎，嚥下障害を主徴とし，上部食道に特徴的な web 像を認める疾患単位として，Plummer-Vinson 症候群が古くから知られている。

我々は著明な口内炎を伴ない，嚥下困難を主訴とする女性に，中部および下部食道の2か所の web 様狭窄を認める症例を経験した。